日本語讀本　卷五

もくろく

一　ラッパ兵ジェズース
二　をぢ様の手紙
三　日本三景
四　日記
五　ひなまつり
六　柿
七　くもの巣
八　少彦名のみこと
九　船ノ上ト寝臺ノ上
十　波
十一　ブラジルの發見
十二　コロンボの卵
十三　小さなねぢ
十四　天孫
十五　犬のてがら
十六　虹
十七　胃と體
十八　分業
十九　月と雲
二十　水力電氣
二十一　笑ヒ話
二十二　二つの玉
二十三　葉書だより

一　ラッパ兵ジェズース

昔ブラジルがパラグワイといくさをした時のことです。
オゾーリオといふ大將の下に、ジエズースといふ黑人のラッパ兵が居ました。
或日のこと、いくさがだんだんはげしくなって、敵味方（てきみかた）、たがひに打出す大砲の音は、天地を
ふるひ動かすばかり血にまみれた死がいは、

（新漢字　下　黑　砲　地　血　死）

（００４．ｊｐｇ）

見る間に山をきづきました。
敵は全力をつくして、するどく攻撃（こうげき）して来ます。ぐづぐづして居ては、味方の負です。
「進め、進め。」
オゾーリオ將軍は、いきほひ強く命令しまし

た。將軍の命令を受けたジェズースは、さつ
そくラッパを口にあてて、
「進めー。」
吹きかけた時、たちまちとび來つた敵のたま
はジェズースのうでをつらぬきました。
ラッパは口をはなれました。けれども、それ
はたゞちょつとの間で、
「進め、進め。」
勇ましいひゞきは、血
のしたゝるうでで
さへたラッパから、全
軍につたはりました。
やがて、また、今一つのた

（新漢字　全　力　命　令　來）

（００５．ｊｐｇ）

まが、ジェズースのうでをつらぬきました。

けれども、ジェズースは、まだしっかりとラッパをにぎつてはなしませんでした。

二　をぢ様の手紙

父「太郎、お前にも手紙が來て居るよ、をぢ様から。」

太郎「あゝ、さうですか。をぢ様はいつ日本へお着きになつたのですか。」

父「手紙によると、十二月十二日無事（ぶじ）横濱に着いたとある。お前の方への手紙にも、書いてあるかも知れない。まあ讀んで御らん。」

太郎「はい。では讀みます。」

コロンボから出したゑはがきは、見ましたらうね。　私はこの十二日の午後、無事横濱に着きました。日本を出てから十年目でまた日本の土をふんだ

わけです。

（新漢字　紙　父　着　横　午　後）

（００６．ｊｐｇ）

横濱からすぐ郷里（きょうり）のゐなかへかへりました。さうして、先祖以來のお墓へおまゐりをしました。村の人たちは皆喜んで私を迎えてくれ、毎日ねるひまもないほどだづねて來ては、ブラジルの話をきかしてくれと言ひます。學校へも行きました。生徒たちが皆規律正しく、すなほで、よく勉強（べんきょう）して居るのにはおどろきました。あなた方も、日本の子どもに負けないよう、勉強をしなければなりません。

ブラジルとはちょうど反たいで、日本は今冬です。この間は雪も少しふり

ました。お正月も、もうすぐです。早い家では、そろそろお餅をつき始めて居ます。

どうか中村先生によろしく。

十二月二十六日　　をぢより

太郎殿

（新漢字　祖　正　反）

三　日本三景

日本の國には、景色のよい所がたくさんありますが、松島天の橋立宮島の三つを、昔から日本三景と申します。

松島は、大小二三百の島が、海上三四里の間にちらばつて居て、島といふ島には、枝ぶりのよい松がしげつて居ます。あたりの高い所からもながめますが、多

くは舟に乗つて、島の間を通つて見物します。晴れた日、月の夜、雪の朝、いつ見てもよい景色です。

天の橋立は、海中へつき出た細長い洲（す）で、長さは一里は、はゞは四十

（新漢字　殿　景　景色　小　上　乗　見　物）

（００８．ｊｐｇ）

五間、その洲の白い砂の上に、青い松が一面に立って居て、長い橋をかけたように見えます。

宮島は、まはりが七里

もある島で、島の山に
は鹿（しか）がたくさんすん
で居ます。
島の東北に、嚴島神社があります。朱ぬりの
社殿が山のみどりを後にして、大そうきれい
に見えます。ことに、し
ほの満ちた時は、社殿や
廻廊（かいろう）が海の中に浮いて、
お話にある龍宮はこれ
かと思はれます。
社前の海に、日本一の大
鳥居があります。

（新漢字　砂　橋　東　北　社　殿　満　前）

二月二十八日　水曜　雨、後晴

夕御はんがすんでから、表へ出ると、ちようどそこへ、日本人のをぢさんが二人お出でになつて、道をおきゝになりました。をしへて上げたら、大へん喜んで、「ありがたう、ありがたう。」と、何べんも言はれました。近頃日本から來たばかりで、まだ少しもこちらの言葉がわからないのださうです。

二月二十九日　木曜　晴

今年は閏（じゆん）年なので、二月の日数（ひかず）がいつもの年よりも一日多くなるのださうです。

學校で先生に「もし、今日生まれたら、お誕生日はどうなるのですか。」ときいたら、先生が、「さうですね。まあ二日くり上げて、二八日にでもするのでせう。」と言つて笑はれました。

（新漢字　記　水　曜　表　出　頃　木　日）

三月一日　　金曜　晴

ずいぶん暑い日でした。

朝學校へ行く時、おかあさんが、「あさっての日曜は、ちようど日本のおひな様の日にあたるから、何か御ちそうをして上げませう。お友だちをお呼びなさい。」とおつしやいました。學校で、ひろ子さん・春子さん・みね子さんにそのことを話して、日曜の午前十一時に來ていたゞくことにしました。

三月二日　　土曜　雨

明日はいよいよおひな様の日ですが、ほんとうのおひな様はありませんから、お人形を出してかざることにしました。それから雑誌（ざつし）にあつた附録（ふろく）のゑで紙のひなだんをこしらへました。小さいけれども、りつぱなものが出來ました。明日の月曜が待遠しくてなりません。

（新漢字　暑　土）

五　ひなまつり

（011．jpg）

お行儀（ぎょうぎ）正しいだいり様、
赤いはかまの官女（かんぢよ）たち、
五人ばやしが次々と、

きれいに並ぶだんの上、
ぼんぼりつけて、すわつて見れば、
金のびようぶがきらきらと、
ゆめのお國の御殿のように。

赤いもうせん美しく、
ひしのお餅にお白酒、
お菓子豆いり、いろいろと、
きれいに並ふだんの上、

（新漢字　殿　豆）

（０１２．ｊｐｇ）

花瓶（かびん）にさした緋桃（ひもゝ）の花、
なかば開いて、にこにこと、
おとぎばなしのおうちのように。

練習問題（れんしゅうもんだい）

一　次の文字（もじ）を書取って、ふりがなをおつけなさい。

大将　　命令を受ける　　全力をつくす
月曜日　　晴後くもり　　午前、正午、午後
日本三景　　見物　　社殿　　大鳥居

二　次にあげた言方についてお考へなさい。

まだ少しもこちらの言葉がわからないのださうです。

まだ少しもこちらの言葉がわからないのです。

六　柿（かき）

私のうちには柿の木が五本あります。澁（しぶ）柿が三本甘（あま）柿が二本で、その中に私の木が一本あります。甘柿です。　これは、私が生まれた年、おぢいさんが、私の分につぎ木をして下さつたのださうです。

おぢいさんが、この柿の木をついでいらつしやる時、下男の太七が、笑ひながら、

（新漢字　下　下　男）

（０１３．ｊｐｇ）

「御いんきよ様、そのお年で、つぎ木ををなさるのですか。」

と言つた

さうです。
その時お
ぢいさんは、

「孫へのこしてやるのさ。」

とおっしゃったといふことです。

今年は柿のあたり年で、どの木にもよくみがなりました。私の木も枝が折れるほどなって居ます。昨日（きのふ）一つ取ってみましたら、もう黒くごまをふいて居ました。

この二十五日は、おぢいさんの命日ですから、たくさん取ってそなへるつもりです。

七　くもの巣

まどから眺（なが）めて居ると、一匹のくもが、すうつと、私の目の前にぶら下って來ました。私は

（新漢字　孫　下）

（０１４．ｊｐｇ）

びつくりしました。

見ると、くもは、軒（ぬき）の所から、絲を引いて下りて來たのです。さうして、そのまゝじつとして、動かうともしません。　これから一たい、何をしようとするのかと思ふと、私は、急におもしろくなって來ました。

くもは、やがて、後の方の足を動かして、おしりの所から、たくさんの細い絲を引出し始めました。絲は一糎、二糎と、見る間にのびて、二米（メートル）くらゐにもなりました。何十本とも知れない、細い、白い絲が夕風にゆられながら、ふはふはと空中にたゞよつて居るのは、ほんとうにきれいでした。

そのうちに、このたくさんの絲の中の一本が、向かふのマモンの木の枝にくつ着きました。

（０１５．ｊｐｇ）

くもには、それがすぐわかるものと見えて、しきりに、この絲を引つぱったり動かしたりして居ましたが、やがて、それを傳はつて、向かふへ渡り始めました。さうして、風にゆられながら、やつとマモンの木にたどり着きました。

くもは、ほつと一安心したようでした。

今度は、前の方の足をしきりに動かして、この絲を自分の方へたぐり始めました。すると、今までたるんで居た絲が、だんだんに、まつすぐになりました。かうして、軒とマモンの木との間に、一すぢの絲がぴんと張渡されました。

くもは、この上を、いそがしさうに行つたり來たりして、巣を作る仕事をつゞけました。私

は、くものちえのあるのにすっかり感心してしまひました。
晩になつて、また行つて見ますと、そこには、もう、りつぱなくものあみが出来て居ました。

（新漢字　傳　張　仕　事　感）

（０１６．ｊｐｇ）

八　少彦名（すくなひこな）のみこと

大國主のみことが、出雲（いづも）の海岸を歩いていらつしやいますと、波の上に、何か小さい物が浮かんで、こつちへ近寄つて來ました。
「何だらう、あれは。」
と、みことはお供の者におつしやいましたが、お供の者にもわかりませんでした。
だんだん近寄つて來るのをよく見ると、豆の

さやのような物を舟にして、それに何か乗って居ました。

「豆のさやに、蟲が乗つて居ます。」

と、お供の者が申しました。

しかし、蟲ではありませんでした。蟲の皮を着物にして着て居る、小さい神様でした。みことは、

「小さい神様だなあ。一たい、何といふお方だらう。」

（新漢字　岸　供　蟲）

（０１７．ｊｐｇ）

とおっしやいますと、お供の者は、

「こんな小さい神様を、私は、見たことも聞いたこともありません。」

と申しました。

「あなたは、どなたですか。」

と、みことはその神様にお尋ねになりました
が、返事をなさいません。
その時、ひよっこり出て來たのは、ひきがへる
でした。みことは、
「おゝひきがへる、よい所へ来た。お前は方
方へ出歩いて、何でもよく知つて居るが、こ
の小さいお方の名を知らないか。」
ひきがへるは、目をぱちくりさせながら、
「いや、存じません。きつと、あの物知りのか
かしが知つて居るでせう。」
と申しました。
かゝしは、田の中に立つて四方を見て居るの
で、何でもよく知つて居ました。　大國主のみ
（新漢字　聞　返　事）
（０１８．ｊｐｇ）
ことは、かゝしに向かつて、

「おうい、お前は、この小さいお方を知って居るか。」

すると、かゝしは、

「それは、少彦名のみこととといふ神様です。

體（からだ）は小さいが、大そうちえのあるお方です。」

と答へました。

大國主のみことは、大そうお喜びになつて、少彦名のみことをおうちへお連れになりました。

二人は、兄弟のように仲よくなさいました。

心を合はせて、野や山を開いて田や畠（はたけ）にしたり、道をつけたり、川に橋をかけたりなさいました。人間や家畜の病氣も、おなほしになりました。

或日、少彦名のみことは、おつしやいました。

（新漢字　兄弟）
（０１９．ｊｐｇ　挿絵あり）
「私はいつまでも、こゝに
居るわけには行きませ
ん。これでおいとまい
たします。」
大國主のみことは、おどろいて、
「どうして。どこへお出で
になるのですか。」
「遠い所へ行きます。」
「何しに行くのです。」
「新しい國を開きに。」
かう言ひながら、少彦名のみことは粟（あは）の莖（くき）に
つかまつてするするとお上りになりました。
すると、一度しなつた粟の莖が、はね返るひよ
うしに、小さい神様の、お體は、ぽんと空へとび
上りました。

「さようなら。」
と一聲おつしゃったまゝ、小彦名のみことのお姿は、もう、見えなくなつてしまひました。

（新漢字　新　聲）

（０２０．ｊｐｇ）

九　舶ノ上ト寢臺（シンダイ）ノ上

或人ガ、始メテ船ニ乗ツタ時、海ガ荒レタノデ、大ソウ弱ツテ居マシタ。ソコヘ、二人ノ水夫ガ、オモシロサウニ、歌ヲ歌ヒナガラ來マシタ。ソノ客ハ、水夫ニ向カツテ、

「コンナニ海ガ荒レルノニ、アナタ方ハ、ヨク平氣デ居ラレマスネ。」

ト音フト、一人ノ水夫ガ、

「平気デストモ、船ハ私ドモノ家デスモ

ノ。船デクラスホ
ド、オモシロイコト
ハアリマセン。ヂ
ヂイモ、父モ、皆、船ノ
上デ死ンダノデス。」
ト言ヒマシタ。
「ソンナニ代々船ノ上デ死ンデモ、船ガコハ

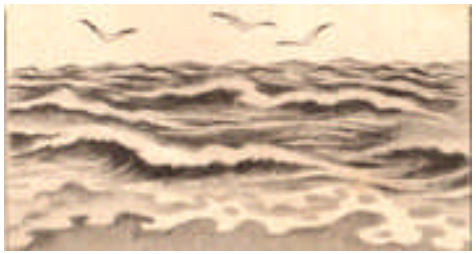
（新漢字　荒　夫　客　代）

（０２１．ｊｐｇ）

クハナイノデスカ。」
ト、客ガフシギガルト、水夫ハ、
「アナタノオトウサン、ハドコデオナクナリ
ニナリマシタカ。」
ト尋ネマシタ。
「父モチ、イモ寢ノ上デ死ニマシタ。」
水夫ハ、
「ソレデハ、アナタモ、寢臺ノ上ガコハイデセ
ウ。」
ト言ツテ、笑ヒマシタ。

十　波

青いうねり、波のうねり、
生きてるように寄って來て、
平な濱に眞白な布をしく、
かもめがどんで、
海はのどか。



（新漢字　平　布）

（０２２．ｊｐｇ　挿絵あり）

をどる、をどる、
　波がをどる。
生きてるように
　寄せて來て、
切立つ岩に
　散る波は
　瀧（たき）のよう。
かもめが鳴いて、
　海は叫ぶ。

練習問題（二）

一　次の文字を、よく讀んでから書取りなさい。
細い絲　海岸を歩く　近寄る　神様
遠い所　海が荒れる　平氣　岩に散る波

二　次にあげた二つづつの言方を讀みくらべなさい。
言った。
おつしゃつた。

喜びました。
お喜びになりました。
どこへ行くのですか。
どへお出でになるのですか。

（新漢字　散　叫　發）

十一　ブラジルの發見

（０２３．ｊｐｇ）

紀元一千四百九十二年ゴロンボがアメリカ大陸を發見すると、これにならつて、新大陸を發見しようと、たんけんに出かける者がたくさんあつた。

コロンボは、イスパニヤの港から出て、西へ西へと進んで行つたが、ポルトガル人ヴァスコ、ダ、ガマは、ちようどそれとは反たいに、東へ東へと向かって行つた。さうして印度（いんど）への航路を發見した。

ポルトガル皇帝（こうてい）はヴァスコ、ダ、ガマの報告（ほうこく）に
もとづいて、こゝに植聽民地（しょくみんち）を作ることとし、總
督（そうとく）として海軍大將ベドロ、デルヴァレス、カブ
ラールを任命（にんめい）した。
カブラールは、紀元一千五百
年三月九日、十三ぞうの船を
ひきゐて、リスボンを出帆し
た。さうして、アフリカ大陸
の沖合遠く航行中、四月二十一日思ひがけな

（新漢字　紀　新　港　西　ヴ　航　路　出　帆　行）

（０２４．ｊｐｇ）
くも、西方にあたって新陸地のあることを發
見した。そこで、こゝに上陸して、イーリヤ、ヴェ
ラクルースと命名した。それはこの土地を

島と考へたためであったが、これが今のブラジルであったのである。

その後、こゝには染料（せんりよう）となるブラジルの木が多いので、誰いふとなくブラジルと呼び、それがつひに國名となったのである。

十二　コロンボの卵

コロンボがアメリカを發見してかへつた時、イスパニヤ人の喜んだことは非常（ひじよう）なものでした。

一日、祝賀會の席上で、人々が代る代る立つて、コロンボ

（新漢字　西　名　土　誰　卵　祝　賀　席）

の成功（せいこう）を祝しますと、一人の男が、
「大洋を西へ西へと航海して、陸地に出あつたのが、それほどのてがらだらうか。」
と言って、冷笑しました。
これを聞いたコロンボは、つと立って、食卓（しよくたく）の上のうで卵を取り、
「諸君、こゝろみにこの卵を卓上に立てて御らんなさい。」
と言ひました。人々は、何のためにこんなことを言出したかと思ひながら、やってみましたが、もどより立たうはずはございません。
この時コロンボは、こつんと卵のはしを食卓に打ちつけ、何の苦もなく立てて、申しました。
「諸君、これも人のした後では、何のぞうさもないことでございませう。」
（新漢字　洋　諸　苦　後）

十三　小さなねぢ

暗い箱の中にしまひ込まれて居た小さなねぢが不意にピンセットにはさまれて、明かるい所へ出された。　ねぢはおどろいて、あたりを見廻したがいろいろの物音、いろいろの物の形がごたごたと耳にはいり目にはいるばかりで、何が何やらさっぱりわからなかった。しかし、だんだん落着いて見ると、こゝは時計屋の席であることがわかった。自分の置かれたのは仕事臺の上にのって居る小さなふたガラスの中で、そばには小さな心棒（しんぼう）や、歯（は）車

や、ぜんまいなどが並んで居る。錐や、ねぢ廻しや、ピンセットや、小さを槌（つち）や、さまざまの道具（どうぐ）も、同じ臺の上に横たはって居る。周圍（しゆうい）の

かべや、ガラス戸棚にはいろいろな時計がたくさん並んで居る。かちかちと氣ぜはしい

のは置時計で、かつたりかつたりと大様なのは柱時計である。

ねぢは、これらの道具や時計をあれこれと見くらべて、あれは何の役に立つのであらう、こ

（新漢字　不　廻　形　時計　置）

（０２７．ｊｐｇ）

れはどんな所に置かれるのであらうなどと考へて居るうちに、ふと自分の身の上に考へ及んだ。

「自分は、何といふ小さい情ない者であらう。あのいろいろの道具、たくさんの時計、形も大ききもそれぞれちがつては居るが、どれを見ても自分よりは大きく、自分よりはえらさうである。一かどの役目をつとめて世間の役に立つのに、どれもこれも不足はなささうである。たゞ自分だけがこのよ

うに小さくて、何の役にも立ちさうにない。
あゝ、何といふ情ない身の上であらう。」
不意にばたばたと音がして、小さな子供が二人、奥からかけ出して來た。男の子と女の子である。二人はそこらを見廻して居たが、男の子は、やがて、仕事臺の上の物をあれこれといぢり始めた。女の子は、たゞじつと見守（まも）つて居たが、やがてかの小さなねぢを見つけて、

（新漢字　及　情）

（０２８．ｊｐｇ）

「まあ、かはいゝねぢ。」
男の子は、指先でそれをつままうとしたが、あまり小さいので、つまめなかつた。二度、三度。　やつとつまんだど思ふと、

直に落してしまつた。
子供は、思はず顔を見合はせた。
ねぢは仕事臺の脚（あし）のかげにころがつた。
この時、大きなせきばらひが聞えて父の時計師（し）がはいつて來た。時計師は、
「こゝであそんではいけない。」
と言ひながら、仕事臺の上を見て、出して置いたねぢのないのに氣がついた。
「ねぢがない。誰だ、仕事臺の上をかき廻したのは。あゝいふねぢは、もうなくなつて、あれ一つしかないのだ。あれがないと、神父さんの懐中時計が直せない。　さがせ、さがせ。」
ねぢはこれを聞いて、とび上るようにうれしかつた。「それでは、自分のような小さな者で

（新漢字　顔　神　父　直）
（０２９．ｊｐｇ）

も役に立つことがあるのかしら。」と、むちゆうになって喜んだが、このような所にころげ落ちてしまつて、もし見つからなかつたらと、それがまた心配になって來た。

親子は總がかりでさがし始めた。ねぢは「ここに居ます。」と叫びたくてたまらないが、口がきけない。三人はさんざんさがし廻つて、見つからないので、がっかりした。ねぢもがっかりした。

その時、今まで雲の中に居た太陽（たいよう）が顔を出したので、日光が店一ぱいにさし込んで來た。すると、ねぢがその光線を受けてぴかりと光つた。仕事臺のそばに、ふさぎ込んで下を見つめて居た女の子が、それを見つけて思はず、

「あら。」

（新漢字　親　光　線）

（０３０．ｊｐｇ）

と叫んだ。

父も喜んだ、子供も喜んだ。しかし一番喜んだのは、ねぢであつた。

時計師は、さつそくピンセットでねぢをはさみ上げて、大事さうにもとのふたガラスの中へ入れた。さうして、一つの懐中時計を出して、それをいぢつて居たが、やがてピンセットでねぢをはさんで、機械の穴にさし込み、小さなねぢ廻しでしつかりとしめた。

龍頭（りゅうづ）を廻すと、今まで死んだようになって居た懐中時計が、たちまち、愉快（ゆかい）さうに、かちかちと音を立て始めた。ねぢは、自分がこゝに位置（いち）を占（し）めたために、この時計全たいが再び活動（かつどう）することが出来たのだと思ふと、うれしくてうれしくてたまらなかつた。

時計師は、仕上げた時計をちょっと耳にあてから、ガラス戸棚の中につり下げた。

一日おいて、神父さんが來た。

（新漢字　再）

（０３１．ｊｐｇ）

「時計は直りましたか。」

「直りました。ねぢが一本いたんで居ましたから、取りかへて置きました。ぐあひのわるいのはそのためでした。」

と言つて渡した。ねぢは、

「自分も、ほんとうに役に立つて居るのだ。」

と、心から満足した。

十四　天孫

天照大御神（あまてらすおほみかみ）は天孫にゝぎのみことをお呼びになつて、

「日本の國はわが子孫が治むべき國である。汝（なんじ）行つて治めよ。天皇の御位は、天地のつづくかぎり、いつまでもさかえるぞ。」

とおつしやいました。さうして、御鏡に、御玉と御劒をおそへになつて、みことにお渡しになりながら、

「この鏡は、われと思つて大切にせよ。」

（新漢字　孫　治　皇　御　位　鏡　劒　切）

（０３２．ｊｐｇ）

とおつしやいました。にゝぎのみことは、つつしんでお受けになりました。

大ぜいの神様が、お供をなさることになりました。　いよいよお立ちといふ時、先發の者が急いでかへつて來て、

「下界へ行くとちゆうに、恐しい男が、道をふさいで立つて居ます。　背も高いが、鼻が恐しく高く、目は鏡のようでございます。　おまけに體（からだ）中から光を出して、天も、地も、明かるいほどでございます。」

と申しました。

天照大御神は、この事をお聞きになつて、

「それは何者であるか、尋ねてまゐれ。天（あま）のうずめ、お前行け。」

とおつしやいました。

天のうずめのみことは、しつかりした氣性（きしよう）で、しかもひょうきんなお方でした。行つて御らんになると、なるほど、相手は恐しさうな男

（新漢字　恐　鼻　相）

（０３３．ｊｐｇ）

です。うずめのみことは、わざと、こつけいな様子をして、お笑ひになりました。すると、その恐しい男が言ひました。

「お前は誰だ。どうして、そんなに笑ふのか。」

「恐れ多くも、天孫にゝぎのみことのお通りになる道をふさいで立って居る、あなたこそ誰です。」

と、うずめのみことはお問返しになりました。

相手は、急に様子をかへて、

「いや、私は、天孫

がお出でになると承つて、こゝへお迎へに
出て居るのです。私が御案内（あんない）いたします。
（新漢字　問　承）

（０３４．ｊｐｇ）

私の名は猿田彦（さるたひこ）と申します。」
と言ひました。
うずめのみことは、かへつて、この事を申し上
げました。
にゝぎのみことは、天照大御神においとまご
ひをなさつて大空の雲をかき分けながら、勇
ましくお降りになりました。　猿田彦のみこ
とが先に立って、ご案内申し上げました。
天孫は、日向（ひうが）の高千穂（たかちほ）の峯（みね）
にお降りになりま
した。さうして、天照大御神のお言葉通りに、
日本の國をお治めになりました。

練習問題（三）

一　次の文字を書取ってふりがなをつけなさい。

大陸の發見　祝賀會　席上　航海　見廻す

置時計　太陽　子孫　相手　恐れ多い

二　次の二つづつの言方についてお考へなさい。

イスパニヤ人の喜んだことは非常（ひじょう）なものでした。

イスパニヤ人は非常に喜びました。

呼びました。

お呼びになりました。

このの事を言ひました。

この事を申し上げました。

（新漢字　降）

（０３５．ｊｐｇ）

十五　犬のてがら

満州事變の最初の夜の事でした。

我が軍にしたがって、傳令の

役をして居た軍犬金剛（こんどう）・那智（なち）
はいよいよ突撃（とつげき）となると、我
が軍の眞先につき進んで、敵
軍の中にとび込み、死物ぐ
るひで、かみつき廻りました。
はげしい戦（たゝかひ）の後、敵は、とうとう陣
地（ぢんち）をすてて逃げました。
折から上る朝日の光に高くかゝ
げた日の丸の旗は、勇ましくかゞ
やきました。　萬歳（ばんざい）の聲は天地に
とゞろきました。　しかしあの金
剛・那智は、どこへ行つたのでせう、
幾ら呼んでも、かへつて來ません
でした。

（新漢字　我　傳　犬　敵　幾）

（０３６．ｊｐｇ）

犬のかゝりの兵士は、一生けんめいになつてさがしました。

とうとう見つけました。けれども、それは折り重なつて死んで居る敵の死がいの間でした。二匹は身に幾つものたまを受けて、血にまみれて死んで居ました。よく見ると、二匹とも、口には敵兵の軍服の切れはしを、しつかりとくはへて居ました。

これを見た兵士は思はず涙（なみだ）ぐみました。軍犬の金鵄動章（きんしくんしよう）ともいふべき甲號功章（どうこうしよう）を、始めていたゞいたのは、實にこの

金剛・那智でありました。

（新漢字　士　重　服　實）

十六　虹

あれ、あれ、虹が立つて居る。
森も小山も下に見て、
向かふの田から、大空の
雲までとゞく弓のなり、
（０３７．ｊｐｇ）
誰がかけたか、虹の橋。

さてさて、虹は美しい。
赤・黄・みどりやむらききと、
七つの色を並ばせて、
空の檜絹（ゐきぬ）へ一筆に、
誰がかいたか、虹の橋。

さてさて、虹はおもしろい。
雨のはれ間にちょっと出て、
用ありさうに天と地の、
遠きをつなぐ雲の上。

誰が渡るか、虹の橋。

あれ、あれ、虹が消えて行く。

あのあざやかな色どりも、

しだいしだいにうすくなり、

小山の方は、もう見えぬ。

（新漢字　筆）

（０３８．ｊｐｇ）

誰が消すのか、虹の橋。

十七　胃と體（からだ）

或時、口・耳・目・手・足等が申し合はせて、胃に向かつて言ひますには、

「僕等は、ふだん、いそがしく働いて居るのに、

君は、たゞすわつて居て物を食ふだけで少

しも僕等のためにつくさない。僕等は一

同申し合はせて、今日からは働かないこと
にしたから、さう思つてくれたまえ。」
と言ひました。　さうして、それから後は、耳は
食事の知らせを聞いても、聞かないふりをし、目は食物
を見ても、見ないふりをし、手は食物を口へ入れるこ
とを止め、足は食堂へ行くことを止めました。
かうして二三日たちますと、耳は鳴り、目はく
らみ、手足はなえてしまって動くことが出来ず、顔の色も
青くなって來て
、體に全く力がな
（新漢字　消　等　僕　働　同　食　堂）
（０３９．ｊｐｇ）
くなりました。この時、胃は一同に向かつて
言ひました。
「君等は、かうなる事は知らをかつたのです
か。僕は、たゞすわつて居て物を食ふだけ
の者ではありません。食つた物をこなし

て、これを血の製造場へ送るのが僕の役目であつて、僕がもし食物をこなさなかつたなら、體を養ふところの血がどうして出來ませう。君等は僕を苦しめようとして、この数日の間、少しも食物を送ってよこしませんでした。そのために新しい血が出來なくなつて、かへつて、君等は自分で苦しむようになつたのです。これは全く、君等が自分で招いた事です。今になって始めて、考へちがひをして居たことがおわかりになるでせう。　君等がもし僕に食物を送るために働いたと言ふなら、僕もまた、君等を養ふために骨を折つたと言ひます。こん

（新漢字　製　造　送　養　苦　招　骨）

（０４０．ｊｐｇ）

なわけですから、これから後は、互に親しみ

合つてくらしませう。世の中といふもの
はすべて相持ちのものです。」
これを聞いて、手・足等一同は、なるほどと感心したといふことです。

十八　分業

マッチはちよつとした物で、價（あたひ）も安く、一包十箱が二ミルレイスぐらゐで買はれる。しかし、これを一人で造るとして、こんなに安く賣れるであらうか。
たとひ休まず働いても、一人で一日に一包は造れまい。かりに造れたとしても、それを二ミルレイスぐらゐで賣つては、まうかるまい。まうかるどころか、非常な損になる。　それでは、マッチはどうして誰が造るのであらう。
マッチの製造所（せいぞうじよ）へ行つて見ると、威工（しよつこう）が大ぜ

い居つて、それぞれ手分をして働いて居る。

（新漢字　互　親　世　業　安　造　非　常）

（０４１．ｊｐｇ）

材木を機械にかけて軸木（ぢくぎ）を、こしらへて居る者もあり、軸木を火でかわかす者もあり、かわかした軸木の先に藥（くすり）をつける者もあり、藥をつけた軸木を温室でかわかす者もあり、かわかしたのをそろへてマッチの箱に

入れる者もあり、箱に入れたのを十づつ集めて包紙に包む者もある。すべてがか

（新漢字　材）

（０４２．ｊｐｇ）

ういふふうに手分をして、別々に仕事をすることを分業といふ。

分業で造ると、その出來がよいばかりでなく、出來高が大そう多くて、一人別々になつて造るのとは、比べものにならない。　したがつて一包のマッチを二ミルレイスぐらゐで賣つても、そうおうにまうかるのである。

分業は、マッチの製造ばかりではない。時計を造るにしても、自動車を造るにしても、家を

建てるにしても、皆これによるのである。
分業で仕事をする時、誰か人の手ぎはがわるいと、全たいの出來までもわるくなる。　やはり、世は相持ちのものである。

十九　月と雲

月のよい晩でした。
或家の前で、子供たちが五六人集つて、遊んで居ました。

（新漢字　比　建　遊）

（０４３．ｊｐｇ）

ところが、いつの間にか、雲が出て來たと見えて、月の光が、急に明かるくなつたり、暗くなつたりしかけました。
子供たちは、みんな言合はせたように、空を仰ぎました。

空には、たくさんの白い雲が浮かんで居て、月は、雲にはいつたかと思ふと、すぐ出、出たかと思ふと、すぐまたはいるのです。

しばらくすると、一人の子供が言ひました。

「あれは、お月様が走つて居るのだらうか、雲が走つて居るのだらうか。」

月は、今雲から出て、大急ぎではなれて行きます。さうして、次の雲の方へどんどん走つて行きます。

「お月様が走つて居るのだよ。」

と、一人の子供が言ひました。

しかし、じつと月を見つめて居ますと、月は動かないで、雲が大急ぎで飛んで行くようにも見えます。

（新漢字　仰　飛）

（０４４．ｊｐｇ）

それで、
「お月様ではない。走つて居るのは雲だ。」
と言ふ子供
もありました。
それからしばらくは、「月が走る。」
「雲が走る。」と、互に言張つて居ました。
みんながわいわい言ふのを、始からだまつて
聞いて居た一人の子供がありました。　その
子供は、この時、みんなからはなれて、前の方に
ある木のそばへ行きました。さうして、しば
らく枝ごしに月を見て居ましたが、
「こゝ　へ來たまへ。雲が走るか、お月様が走
るか、よくわかるよ。」
と言ひました。
（０４５．ｊｐｇ）
みんな木のそばへ來ました。
「こゝに立つて、お月様を枝の間から見たま

へ。」

とその子供が言ひました。

その通りにみんながしてみました。

すると、月は枝の間にじつとして居ますが、雲はさつさと走つて行きます。

「わかつた、わかつた。走つて居るのは、雲だ、雲だ。」

と、みんなが言ひました。

練習問題（四）

一　次の文字を讀んでから、書取りなさい。

死物ぐるひ　日の丸の旗　僕等　食物　世は相持ち

分業　製造場　月夜の晩

二　次にあげた文をきつて、六つの文（ぶん）にして御らんなさい。

軸木をこしらへて居る者もあり、軸木を火でかわかす者もあり、かわかした軸木の先に藥をつける者もあり、

かし

藥をつけた軸木を温宮でかわかす者もあり、かわ

たのをそろへてマッチの箱に入れる者もあり、箱

に入

れたものを十づつ集めて色紙に包む者もある。

三　次の言葉の反たいにあたる言巣を知つて居ますか。

暑い　多い　安い　好き　敵　苦しい　暗い　低

い

（０４６．ｊｐｇ）

二十　水力電氣

水が火になる

水力電氣、

水の力で

電氣を起す。

高い山から、

落すよ、水を。

水のいきほひ機械が動く。

山で起こした電氣の力、

野越え、村越え都へ來れば、
内は電燈、外には電車、
町はかゞやく光の都。
（新漢字　電　機　械　越　燈）

二十一　笑ヒ話

（０４７．ｊｐｇ）

（一）

「海ノ上デモ、歩ケサウダ。」
「ドウシテ。」
「左足ガ沈マナイウチニ右足ヲ出シ、右足ガ沈マナイウチニ左足ヲ出ス。」
「ナルホド、理クツハサウダ。」

（二）

月ト日ト雷ガ、同ジ宿屋ニトマリマシタ。　朝、

雷ガ目ヲサマシテ見ルト、月ト日ガ居リマセン。宿ノ者ニ聞クト、モウ、トウニオ立チニナリマシタ。」ト言ヒマス。雷ハ感心シテ、

「アヽ、月日ノタツノハ早イモノダ。　自分ハ夕立ニシヨウ。」

二十二　二つの玉

昔、火照（ほでり）の命（みこと）と火遠理（ほをり）の命（みこと）といふ兄弟の神様がありました。兄の火照の命は毎日、海へ出て魚を取り、火遠理の命は、山へ行って鳥や獣を

（新漢字　沈　雷　宿　魚　獣）

（０４８．ｊｐｇ）

取っていらつしやいました。

或日の事でした。　火遠理の命は兄神の所へお出でになつて、

「にいさん、かうして、毎日々々、二人で同じ事
ばかりして居ても、おもしろくありません。
いかゞでせう、今日一日だけ、あなたは山へ
狩（か）りに行き、私は海へ魚を取りに行く事に
しては。」
とおつしやいました。
兄神は、なかなか、御承知になりませんでした。
けれども、命があまりおすゝめになるので、
「それでは、今日は山へ行ってみよう。お前
は海へ行くがよい。」
とおつしゃつて、釣（つり）針
と弓矢をお取代へになり
ました。
命は、喜び勇んで、海へ釣
りにお出かけになりま

（新漢字　承　知）

（０４９．ｊｐｇ）

した。けれども、魚は一匹も釣れず、その上、大切な釣針まで魚に取られておしまひになりました。

兄神は、弓矢を持つて、山へ狩りにお出でになりましたが、これも烏一羽、獣一匹取る事が出來ず、きげんをわるくしておかへりになりました。

命は兄神の所へお出でになって、釣針をなくした事を申し上げていろいろおわびになりました。しかし、兄神は、どうしても、おゆるしになりませんでした。

そこで、命は御自分の劍をくだいて、五百本の釣針をお作りになりました。さうして、

「これをさし上げますから、御かんべんを願ひます。」

とおつしやいましたが、兄神は、やはりおゆるしになりませんでした。

（新漢字　願）

（０５０．ｊｐｇ）

今度は千本の釣針を作ってお上げになりました。しかし、兄神は、

「もとの針を返せ。外のは、何本持つて來ても、だめだ。」

とおつしやって、どうしても、おゆるしになりませんでした。

命は仕方なく、もとの海べへ來て泣いていらつしやいました。そこへ、一人の年とつた神様がお出でになつて、

「どうなさいました。」

とお尋ねになりました。

命は兄神の釣針をなくして困って居る事をお話しになりました。すると其の神様は、

「それは、お困りの事でせう。私がよい事を教へて上げます。」
とおつしやいました。さうして、命を小舟に乗せて、
「今此の舟をおし出しますから、しばらく目
（新漢字　其　教　此）
（０５１．ｊｐｇ）
をつぶつていらっしゃいませ。間もなく、きれいな御殿へお着きになります。それは、海の神様の御殿です。其の門のわきに井戸があつて、そばに、一本の大きな木があります。それにのぼつて、待つていらつしやいませ。　海の神様がきっと、あなたによい事を教へて下さるでせう。」
とおつしやいました。
命は、間もなく、海の御殿にお着きになりました。なるほど、門のわきに井戸があつて、そば

に大きな木がありました。命は木にのぼって、待つていらつしやいました。しばらくすると、門の内から、一人の女が出て來ました。水を汲まうとしてふと井戸の中を

（新漢字　内）

（052．jpg）

のぞくと、美しい神様のお姿がすみきつた水にうつつて居ます。女はびつくりして見上げました。命は靜（しづ）かに、

「水を一ぱい下さい。」

とおつしやいました。女はすぐ水を汲んで、命にさし上げました。さうして、此の事を海の神様に申し上げました。

海の神様は、しばらく考へていらつしやいましたが、

「それはきつと、天の神様にちがひない。」

とおつしやつて、急いで行つて御らんになると、果してさうでした。　大そうお喜びになつて、命を御殿の中へ御案内をなさいました。

それから、御殿では大さわざでした。天の神様がお出でになつたといふので、毎日々々、海の世界の珍しいをどりをしたり、おいしい御ちそうをしたりして、命をおもてなしになりました。

（新漢字　果　案　内）

（０５３．ｊｐｇ）

命は月日のたつのも忘れて樂しくおくらしになつて居ましたが或日、ふと兄神の事を思ひ出して、思はず大きなため息をなさいまし

た。海の神様がそれをお聞きになつて、
「あなたは、今、ため息をなさいましたが、海の世界がおいやになつたのではありませんか。それとも、何か御心配でもあるのですか。」
とお尋ねになりました。
命は兄神の釣針をなくした事を、くはしくお話しになりました。すると海の神様は、海にすんで居る魚を、残らず集めて、
「誰か、犬の神様の釣針を持つて居る者はないか。」
とお聞きになりました。魚どもは聲をそろへて、
「存じません。しかし、此の間から、鯛（たひ）が、何かのどにさゝつて、物がたべられないで困る

（新漢字　樂　息）

（０５４．ｊｐｇ）

と申して居ます。
きつとあれが取
つたのでござい
ませう。」
と申し上げました。
さつそく鯛を呼出
してのどをさがし
て御らんになると、果し
て、釣針が引つかゝつて
居ました。で、すぐそれを取出しきれいに洗
つて、命にお上げになりました。　命は大そう
お喜びになりました。
命が、お禮をのべて、かへらうとなさいますと、
海の神様は、二つの玉を出して、
「此の一つはしほみつ玉と申して、これを水
につけると、たちまち海水が満ちて來て、一

面の大水となります。　今一つはしほひる玉と申して、これを水につければどん大

（０５５．ｊｐｇ）

水でも、たちまち引いてしまひます。此の二つの玉をさし上げます。これさへあれば、どんな惡者が來ても少しも恐れる事はありません。」

とおつしやいました。

命は、此の玉を持ち、大きなわにざめに乘つてもとの海べへおかへりになりました。さうして、兄神に釣針をお返しになりました。兄神は、大そうお喜びになつて、

「どうもありがたう。ほんとうに、むりな事を言つてすまなかつたね。」

とおつしやいました。

其の後、命は、二つの玉で惡者どもを平げ、よく國をお治めになりました。

二十三　葉書だより

（一）

日本の滯在（たいざい）も大分長くなりましたか

（新漢字　惡　分）

（０５６．ｊｐｇ）

ら、いよいよ來月出帆の船で、ブラジル

へかへることにしました。　出發まで

に、一度福岡（ふくをか）のをばさんにあつておき

たいと思ひ、今九州へ行く途中です。

ついでに京都や大阪を見物するつも

りですから、見物した所から、繪業書を

送りませう。

月　　日　汽車中にて　　をぢ

（二）

昨夜は京都にとま

りました。さうして今日は、一日京都市内を見物しました。こゝは明治になるまで千二百年の間、日本の都になつて居た所です。寫眞は京都御所です。

（新漢字　來　途中　京　都　繪　昨　市　明　治　寫　眞）

月　日　京都にて　をぢ

（三）

これは奈良（なら）公園の景色です。鹿は皆よく人になれて、お菓子などをやると、喜んでたべに來ます。

こゝも昔都のあった所です。

月　　日　奈良にて　　をぢ

（四）

大阪に來ました。こゝは日本第一の工業都市です。此の盛んな煙突の煙を卸らんなさい。

月　日　大阪にて　をぢ

（五）

これは大阪城の天守閣（てんしゅかく）です。

此の城は、昔豊臣秀吉が建て

（新漢字　園　第　工　盛　煙　城）

（０５８．ｊｐｇ）

たものですが、石垣（いしがき）の石の中には、たて六米（メートル）、横十一米（メートル）といふ大きなものがあり

ます。今の天守閣は近年
再興し
たものです。

月　日
大阪にて　をぢ

（六）

これは神戸港です。
あなたのおとうさ
んもおかあさんも、
十五年前皆此の港
から出帆してブラ
ジルへ行かれたの
です。

月　日　神戸にて　をぢ

（新漢字　港）

（０５９．ｊｐｇ）

（七）

福岡へ來て、をばさん
の所へやつかいにな
つて居ます。をぢさ
んも、をばさんも皆御
丈夫です。昨日はを
ぢさんと一しょに、八
幡（やはた）の製鐵所を見物
しました。くはしいお
話は、かへつてからします。
これは其の製鐵所の寫眞です。

月　日　福岡にて　をぢ

（新漢字　丈　昨日）

練習問題（五）

一　次の文字を書取つてふりがなをおつけをさい。

水力電気　電橙　電車　宿屋　釣針　烏一羽獣一匹

御殿　御心配　御案内　ため息　悪者ども

二　次にあげる二つづつの言葉を讀みくらべなさい。

かへりました。
おかへりになりました。

上げました。
お上げになりました。

待つて居ます。
待つていらつしやいました。

（０６０．ｊｐｇ）

漢　字　表

（新出）

砲地血令紙父横午祖反殿景乗砂橋北社記曜

表頃暑豆孫傳張仕事感供蟲虫聞新聲荒夫客

布散叫發紀港西航路帆誰卵祝賀席洋諸苦不

廻形計置及情顔親線再治皇位鏡劍恐鼻相問

承降我敵幾士服實筆等僕働堂製造送養招骨

互業非材比建遊仰飛電機械越橙沈雷宿魚獣

願其教此内果案樂息惡途京繪咋市寫園第工

盛煙丈

（讀替）

下黒死全力命來着後正景色小上見物東殿満

前水出木日土殿下下男下岸返事兄弟代平新

出行西名土後時計神父直光孫御切傳犬重消

同食苦親世安造常承知内分來都明治眞城港

昨日

（假名附）

味(ミ)攻(コウ)撃(ゲキ)無(ブ)郷(キョウ)以(イ)墓(はか)迎(むかへ)規(キ)律(リツ)勉(ベン)強(キョウ)餅(モチ)天あま)宮(みや)洲(す)鹿(しか)嚴(いつく)島(しま)朱(シュ)廻(カイ)廊(カイ)龍(リュウ)宮(グウ)閏(ジュン)数(かず)(タン)形(ギョウ)雑(ザツ)誌(シ)附(フ)録(ロク)行(ギョウ)儀(ギ)官(カン)女(ヂョ)花(カ)瓶(ビン)

緋(と)桃(もも)柿(かき)澁(しぶ)甘(あま)巣(す)軒(のき)糎(センチメートル)米(メートル)少(すくな)彦(ひこ)出雲(いづも)體(からだ)畠(はたけ)家(カ)畜(チク)栗(あは)莖(クキ)

寢(シン)臺(ダイ)瀧(たき)印(イン)皇(コウ)帝(テイ)報(ホウ)告(コク)植(ショク)民(ミン)總(ソウ)督(トク)任(ニン)染(セン)料(リョウ)成(セイ)功(コウ)冷(レイ)笑(ショウ)

(061.jpg)

卓(タク)込(こむ)棒(ボウ)歯(は)錐(きり)槌(つち)道(ドウ)具(グ)周(シュウ)圍(イ)棚(たな)守(まもる)脚(あし)師(シ)懐(カイ)頭(ヅ)愉(ユ)快(カイ)位(イ)

置(チ)占(しめ)活(カツ)照(てらす)汝(なんぢ)天(あめ)性(ショウ)猿(さる)日向(ひうが)千(ち)穂(ほ)峯(みね)洲(シュウ)變(ヘン)最(サイ)初(ショ)金(コン)剛(ゴウ)

那(ナ)智(チ)突(トツ)戰(たたかふ)陣(ヂン)萬(バン)歳(ザイ)涙(なみだ)鵄(シ)勲(クン)章(ショウ)號(ゴウ)虹(にじ)絹(キヌ)胃(イ)數(スウ)價(あたひ)損(ソン)職(ショク)

軸（ジク）藥（くすり）温（オン）室（シツ）理（リ）火（ほ）照（てり）命（みこと）遠（を）狩（かり）釣（つり）井（ゐ）汲（くむ）靜（しづ）鯛（たひ）禮（レイ）滯（タイ）在（ザイ）福（フク）

岡（をか）九（キュウ）州（シュウ）阪（サカ）煙（エン）守（シュ）閣（カク）豊（とよ）臣（とみ）費秀（ひで）吉（よし）再（サイ）興（コウ）神戸（かうべ）幡（はた）

を　は　り

昭和十二年四月十五日印刷
昭和十二年四月二十日發行

著作權所有　著作權

發行者　ブラジル日本人教育普及會

東京市下谷區二長町一番地
凸版印刷株式會社
印刷者　井上源之丞

印刷所　東京市下谷區二長町一番地
凸版印刷株式會社